

川端康成における宗教関連文献の受容についての調査研究(二)

——雑誌「変態心理」(第一巻二号 大正六年十一月) 掲載の民俗学文献他——

片山倫太郎

(承前)

三 三枝十一「輪廻転生に関する伝説(上)」、および、加藤元一「珍しい睡遊の例」(「変態心理」第一巻二号 大正六年十一月)

『海の火祭』(昭和二・八・十二)の「香の樹」の章において、多量に引用されている文献の一つが、右の三枝十一「輪廻転生に関する伝説(上)」である。

三枝十一は「変態心理」誌上で、次号(第一巻三号 大正六年十二月)に「輪廻転生に関する伝説(下)」を、さらに、「生贄と人身御供の伝説」(第一巻六号 大正七年三月)、「生霊の伝説」(第二巻二号 大正七年六月)、「髑髏保存の遺風」(第二巻七号 大正七年十一月)、「死人の伝説」(第八巻二号 大正十年八月)、「西洋の奇習と伝説」(第八巻三号 大正十年九月)と連載しているが、調査したところ、これらの記述のほとんど全ては「A BOOK OF FOLK-LORE, by Sabine Baring-Gould, 1913」からの翻訳である。

三枝は、その典拠の存在を明示していない。したがって、「輪廻転生に関する伝説」他は、S Baring-Gouldが逸話を収集し、記述したものであるにもかかわらず、あたかも、三枝が収集し、記述したかのような外観である。

もっとも、三枝は其中で、S Baring-Gouldの名前をときおり登場させている。しかし、全編をS Baring-Gouldに負っていることを明らかにしていないため、S Baring-Gouldと記した箇所だけがそれを参照したかのような印象となっている。たとえば、原文の「I was visiting an old woman who was bedridden when one day she said to me:」は、「パーリング・ガウルド氏が、或日病臥中の老婆を見舞ひに行つたら、病人は氏に向つて斯う物語つたさうだ。」という具合に伝聞の形に記述されており、この部分以外にS Baring-Gouldの引用はないと見えてしまうのである。後に述べるように、川端は「輪廻転生に関する伝説(上)」のほぼ全文を用い、さらに、その記述に即した形で、「香の樹」の章を制作している。したがって、実際は「A BOOK OF FOLK-LORE」

を引用しているのだが、川端にその自覚はない。

「輪廻転生に関する伝説(上)」は、「輪廻の思想」と「輪廻の伝説」の章があり、「輪廻の伝説」には「ヘリユクセンバークの白兔／ローン
の山羊／巫女と兎／老婆と梟／娘と白鳥／薔薇の木の物語」の逸話が
取められている。以下は、「香の樹」の記述の順序に従って、両者の
照合をおこなってゆきたい。

「ファウストのグレエトヘンが牢屋の中で歌ふ歌——あれなんか
もさうでございませう。」

「さう、さう。あの歌はギリシヤの伝説から出てゐるんぢやない
のですか。」と、会員の一人が月子の話に口を入れた。

「さあ、ゲエテが何から思ひついたか存じませんが、スコツ
トランドやハンガリーや南フランスなんかにも、同じやうな伝説
が残つてゐるさうでございませう。」

その夜の須彌燈会で輪廻転生の話が出た時に、月子は西洋のい
ろんな伝説をならべ立てて会員達を驚かせたのだつた。印度には
ヴェダ経の昔から輪廻転生の信仰があり、仏教がその思想を秋の
柿の果のやうに美しく熟させたのだから、元来が東洋風な考へ方
であるにちがひない。その伝説も古い墓場の石碑の数のやうに幾
らでも捜し出すことが出来る。しかし、キリスト教の聖書にはそ
んなことを説いてゐない。西洋ではどうなのだらう。

「大分大昔だが、ピタゴラスやその一派の連中はその考へを持つ

てゐたらしい。悪人の魂は来世で獣や鳥なんかの体内に押し込め
られて苦しまねばならんと説いてゐる。」と会員の一人がいつた。

「スペイングラアの『西洋の没落』といふ本がこの頃西洋の思想界
に旋風を起したが、その中に(植物の運命と人間の運命との似通
ひを深く感ずることがすべての抒情詩の久遠の題目である。)と云
つたやうな言葉があるのは、非常に面白いと思つたな。輪廻転生
とはなんのかかはりもないが、今ちよつと思ひ出したんだ。」と
会員の二人が云つた。

「輪廻転生の説は仏教の数珠のやうなものかもしれないが、しか
し釈迦は輪廻の絆より解脱して涅槃の不退転に住せよと衆生に説
いてゐるんだから、転生を繰返して行かねばならぬ魂は、まだ迷
へる魂の哀れさなんだね。」と会員の三人が云つた。

「輪廻の絆から解脱して仏になつてしまふ——私仏になることな
んか考へもいたしませんけれど、輪廻転生の教へ程豊かな夢を織
り込んだおとぎばなしはこの世にないと思ひますわ。人間が作り
出した一番美しい愛の詩だと思ひますわ。いいことをした雀は来
世で人間に生れ変わるが、悪いことをした女は蛇に生れ変わる——そ
んな風な勸善懲惡の道具に用ふからつまらない子供だましになる
んですけれど。」

そして月子はグレエトヘンの歌に歌はれた昔話を手初めに、西
洋のいろんな伝説を話し出したのだつた。

〔「香の樹」全集五八四―五八六頁(注1)〕

右の部分は、ヘスペングラアの『西洋の没落』に関する記述を除いて、次の二箇所が符合する。この二箇所は、「輪廻転生に関する伝説(上)」の冒頭と末尾の部分である。

輪廻の思想

数年前、印度セイロン島の裁判所で有名な一兇漢に死刑を宣告した事があった。彼は其の地の土人であつたが、判決が申渡された時判事を睨みつけて「宜ろしい。俺は直ぐ犬に生れ替り貴様を咬み殺してやるから」と怒鳴つたさうである。元来印度人はヴェタの昔から永遠不滅なる靈魂の存在を信じ、其れは肉体を離脱したる後六道を転々し業果に従つて畜生にでも餓鬼にでも宿り転生を遂げねばならぬものと考へてゐる。さうして彼等の宗教は何れも此の輪廻の事に説き及んでゐるのである。

釈迦が正覺の仏として現はるゝに及び、遍く衆生に向つて「怨を絶ち情を消して涅槃に達し不退転に住することにより輪廻の絆より解脱せよ」と教へたのは、明かに古来の輪廻觀念に対する革命の声であつた。けれども印度の衆生は決して輪廻の思想より解放され得る者ではなかつた。さうして此の思想は今日に至るまで猶印度の人心に深く浸潤し、牢乎として抜くべからざる信仰となつて居る。

西洋に於ても古い時代からピタゴラス及び其の一派は、人間の靈魂は生前の行状の如何により色々な有象無象に宿ると説いて居

る。即ち悪人の亡靈は卑い禽獸などの体内に幽閉され、再び人間界に帰るまで罪業償却の爲め長く難行苦行を積まねばならぬが、然し道徳的生涯を送つた人の靈魂は高貴な動物か貴人に生れ變ると教へた。ピタゴラスをして斯る思想に達せしめたのは矢張り靈魂不滅の信仰で、魂が一方を去ると云ふ事は即ち他の一方に入ると云ふ事で、あると推論せざるを得なかつたのである。此外南洋やアメリカの原住民も、人間の魂は動植物を始め無生物にまで宿ると信じ、トテム動植物を尊信して居る。

以上の如く輪廻転生の思想は東西を通じて多少とも遍く各民族に瀰漫して居る。けれども印度人を始め一般アリアン人種に於て特に其の色彩が著しいやうである。

輪廻の伝説

輪廻の思想のある所其処にまた其の伝説が存在する。印度に於けるそれは仏教の傳來と共に早くより我が国に伝はつた。さうして此の流れを汲む伝説が我が国にも無数に發生して居る。然し我等は今之れに就いて語ることを暫く止め、今日基督教国と称せらるゝ、歐洲諸国のそれを紹介して見たい。西洋人の碧眼には東洋の諸国は妖仙フェアリーの国として映ずるさうであるが、我等の黒い眼を以て見た時、彼等の国も亦不思議な伝説に富む一種の妖仙国たるを失はないのである。

〔輪廻転生に関する伝説(上)〕冒頭

此伝説は今日種々に変形して各国に存在して居る。実にギリシヤの昔話にも、スコットランドにも、ハンガリーや南フランスなどにも、此伝説が残つてゐるのである。ファウストでも狂女グレッツェンが牢屋の中で之れに似た俗謡を歌ふ。グリムの童話中にも亦これが集められてある。これらの伝説では小鳥を少女の生れ変りとするのであるが、之は白兔や白鳥を娘の生れ変りと考へるのと大した相違はない。然し茲に注目に価する一事がある。それは曩に蠟燭を取つて逃げた犬を、其時未だ生きてゐた継母の化身と見ることである。即ち生前に於て既に人間が動物に転生したと云ふのである。斯くの如き一種変則な輪廻伝説も亦仲々多い。然しこれは変身の伝説とも称すべきものであるから、項を改めて述べることにする。(以下次号)

〔輪廻転生に関する伝説(上)〕末尾、「輪廻の伝説」中の「薔薇の木の物語」

片仮名表記における長音符の廃止、〈ゲレッツェン〉を〈ゲレエトヘン〉と書き換えていること等の細かな部分を除いて、両者は一致する。川端が三枝に付加しているのは、〈仏教がその思想を秋の柿の果のやうに美しく熟させた〉〈古い墓場の石碑の数のやうに〉といった比喩表現程度であり、オリジナルな箇所は〈スペイングラアの『西洋の没落』を関連づける点に限られている。しかし、その関連づけは〈輪廻転生とはなんのかかはりもないが、今ちよつと思ひ出したんだ。〉と、

いささか遠慮がちなもの言いである。

なお、『抒情歌』(昭和七・二)にも、同様の記述がある。『抒情歌』には、〈釈迦は輪廻の絆より解脱して涅槃の不退転に入れど、衆生に説いておられるのでありますから、転生をくりかえしてゆかねばならぬ魂はまだ迷へる哀れな魂なのであります。せうけれど、〉〈インドにはヴエダ経の昔からこの信仰がありますから、もともと東方の心なのでせうけれども、ギリシヤ神話にも明るい花物語がありますし、ファウストのグレートヘンの牢屋の歌をはじめ、西方にも動物や植物への転生の伝説は星屑よりも多いのであります。〉あるいは、〈大昔のピタゴラスの一派なんかも、悪人の魂は来世でけだものや鳥の体内におしこめられて、苦しまねばならないと考へてをりました。〉(全集第三巻、四八四―四八六頁)とある。

さて、右の最後の引用の冒頭にある〈此伝説〉とは、三枝が〈薔薇の木の物語〉と名付けている継母と娘についての話である。川端は、続いてその話を記述している。

そして月子はグレートヘンの歌に歌はれた昔話を手初めに、西洋のいろんな伝説を話し出したのだつた。

——娘が荒物屋で蠟燭を一把買って来た。継母のいひつけだつた。ところが家の階段のところまで帰つて来て買物を落した。犬が落ちた蠟燭をくはへて行つてしまつた。娘は店へ戻つて代りを買つて来た。また同じ階段のところで落した。さつきのやうにそ

の蠟燭を犬に取られてしまった。やはり荒物屋へ引き返したが、今度も不思議と前のやうに落ちて犬に持つて行かれてしまった。金も蠟燭もなくしてしまった。娘は継母に叱られて泣いてゐるよりしやうがなかつた。やがて継母がいつた。

「ここへ来て頭を私の膝にお載せ。髪を梳いて上げるから。」
絹のやうな美しい金髪が母の膝から床まで垂れ下つた。

「お前の髪は膝の上では結へやしない。木の台を持つておいで。」
娘は云はれた通りにした。

「お前の髪は櫛では結へやしない、斧を持つておいで。」
娘は素直に斧を持つて来た。

「さあ、髪を結つて上げるから、頭を台にお載せ。」
娘はあどけなく小さな美しい首をその台の上に差延べた。継母が斧を打下した。少女の首が飛んだ。それから継母は娘の心臓と肝臓とを抉り取つて、その日の夕飯の汁に入れた。父は妙な匂ひがするといひながら食べた。腹ちがひの弟は母が無理やりに食べさせようとする庭へ飛び出してしまった。そこで姉の死骸を見つけた。弟は箱の中に姉を入れて、薔薇の木の下に埋めた。毎日薔薇の木の下へ行つて泣いた。

春、その薔薇に花が咲いた。花へ白い小鳥が来て美しい声で歌つた。靴屋の店先と薔薇の木とを飛び交ひながら、母に殺され、父に食はれ、可愛い弟に葬られ、今は小鳥に生れ變つて空で歌ふ自分の身の上を歌つた。靴屋が白い小鳥にいつた。

「その美しい歌をもう一度歌つておくれ。」
「もしその小さい赤い靴を下さるなら。」

赤い靴を貰つた小鳥は同じ歌を歌ひながら時計屋の前の木へ飛んで行つた。

「おお、いい歌だ。もう一遍歌つておくれ。」
「もしあなたの手にある金時計と鎖を下さるなら。」

それから白い小鳥は片足に靴を穿き片足に鎖を巻きつけて、粉屋が三人で石臼を彫つてゐるところへ飛んで行つた。そこでも同じ歌を歌ひ、もう一度聞かせるお礼として首に石臼を結びつけて貰つた。

そしていよいよ継母の家へ飛んで行つた。石臼を軒へぶつつけた。

「雷だ。」と継母が叫んだ。弟が走り出すと、赤い靴が足もとへ落ちて来た。続いて父が走り出すと鎖が首へ落ちて来た。おしまひに駈出した継母は頭へ石臼が落ちて来て声も立てずに死んでしまった。

（「香の樹」全集五八六―五八八頁）

薔薇の木の物語――昔し或る町に両親と娘が住んで居た。母が死んでから父は再婚した。後妻に一人の男の子が生れた。この継姉弟は仲が好かつたけれども継母は姉を憎んだ。或る日のこと継母は娘へ用事を云ひつけた。「お前荒物屋へ行つて蠟燭を一把買つ

てお出で。」娘はそれを買つて帰つて来たが家の前の踏段の所で買物を落すと、犬が来て銜へて行つてしまつた。娘は店へ戻つて代りを買つて来た。しかし踏段の所まで来ると不思議にも蠟燭はまた落ちて、再び犬に取られた。娘は、また買ひに戻つたが今度もやはり同じ結果に終つた。娘は錢も蠟燭も皆無くしたので、繼母の所へ帰つて唯泣いて居るより外しやうがなかつた。

やがて繼母は云つた。「来なさい、髪を梳いてあげるから頭を私の膝へ載せなさい。」繼母は櫛を取つて娘の絹のやうな金髪を梳きはじめた。その美しい髪は母の膝から床へ垂れ下つた。さうして娘の髪の美しいと云ふ事が繼母にとつては憎悪の種となるのであつた。「お前の髪は膝の上では結はれない。木の台を持つてお出で」と母は命じた。娘がそれを持つて来ると繼母はまた、「お前の髪は櫛では結はれない。斧を持つてお出で」と云ひ出した。娘は温順に斧を持つて来た。「さあ、髪を結つてあげるから、頭を台に載せなさい。」邪慳な繼母は斯う云ひ放つた。娘は何気なしに其の小さな美しい頭を横たへた。此時、斧は下り少女の首は飛んだ。繼母は娘の心臓と肝臓を取り、それで汁を作り夕食に出した。父は少し食べて、へんな香りがすると云ふ。母は息子にも与へたが食べない。無理やりに食べさせやうとすると庭へ飛び出し、姉の屍を取り上げて箱に入れ、薔薇の木の下へ埋めた。さうして毎日其処へ行つて泣いた。

春になつて其の薔薇に花が咲いた。花の間へ白い小鳥が来て好

い声で歌ふ。小鳥は靴屋の前へ飛びまた薔薇の木へ止まり、さうして歌ふ……

邪慳な母は／私を殺し。／好い父さんは／私を食ふ。／可愛
い小さい／私の弟は／地に坐し／私は空で歌ふ。(注2)

「その美しい歌をもう一度歌つておくれ」と靴屋は頼んだ。小鳥は答へた。「若し其の小さい赤い靴を下さつたら。」靴屋はそれを与へた。小鳥は歌を歌ひ、それから時計屋の前の木へ飛んで行き又同じ調子で歌ひ始めた。「お、い、歌だこと、また歌つておくれ」と時計屋は頼んだ。「若し貴方の手にある金時計と鎖を下さつたら」と小鳥は答へた。

時計屋がそれを与へると小鳥は歌を繰返し、それから片足に靴を穿き、片足に鎖を纏うて、三人の粉屋が石臼を挖つて居る所へ飛んで行つた。其処でも亦小鳥は木に止まつて歌を歌ひ、二度目の歌の報酬として首に石臼を結付けて貰つた。やがて小鳥は繼母の家へ行き、石臼を軒へ打付けた。「雷！」と繼母が叫ぶ。弟は雷鳴を聞かうとして走り出ると足下へ赤い靴が落ちて来た。続いて父が出ると首の所へ鎖が落ちた。最後に母が駆けつり出たが、頭へ石臼が落ちて即死したと云ふ。

此伝説は今日種々に変形して各国に存在して居る。実にギリシヤの昔話にも、スコットランドにも、ハンガリーや南フランスなどにも、此伝説が残つてゐるのである。ファウストでも狂女グレッツチエンが牢屋の中で之れに似た俗謡を歌ふ。グリムの童話中に

も亦これが集められてある。これらの伝説では小鳥を少女の生れ変りとするのであるが、之は白兔や白鳥を娘の生れ変りと考へるのと大した相違はない。然し茲に注目しに値する一事がある。それは曩に蠟燭を取つて逃げた犬を、其時未だ生きてゐた継母の化身と見るのである。即ち生前に於て既に人間が動物に転生したと云ふのである。斯くの如き一種変則な輪廻伝説も亦仲々多い。然しこれは変身の伝説とも称すべきものであるから、項を改めて述べることにする。 (以下次号)

〔輪廻転生に関する伝説(上)〕「輪廻の伝説」中の「薔薇の木物語」

文章を簡潔にする方向で改変されたことは一目して分るが、そのことに関連して、この逸話についての説明と解釈を省いた川端の筆遣いは、注意しておいてよいと思われる。原典では冒頭から、継母が娘を憎む事情が述べられているが、川端はその憎悪をあからさまには記述していない。また、三枝には、〈蠟燭を取つて逃げた犬を、其時未だ生きてゐた継母の化身と見る〉という解釈があるが(実際は、S.Baring-Gouldの解釈である)、これも省かれていたのである。この逸話が登場人物の月子によって紹介されていることを、勘案してみる必要がありそうである。月子はこの場面の後、花の神の〈浅間しい嫉妬〉によつて宮殿から追放され、悲しみに泣き明かしたアネモネが、ついに転身して〈草花の素直な心でいつまでも自然の恵みを受けよう〉と

決心したという話を紹介している。このアネモネに限りない親近感を抱く月子であつてみれば、その台詞から憎しみの言葉を削除することは妥当な措置であつたと考えられるのである。

月子は続けて、ヘルクセンブルグの古城の伝説を語っている。

「ルクセンブルグの古城の伝説を二つ存じて居りますわ。二つともおさまりの結婚の悲劇なんですけれど。」と月子は話し続けた。

ルクセンブルグの町を周る城壁は守備兵に守られてゐた。その士官の一人がある娘を恋した。娘の父が許さなかつた。こつそりと娘を修道院に入れてしまつた。しかし修道院の窓は城壁と向ひ合つてゐた。だから士官は直ぐに娘の姿を見つけ出し、次の夜番の真夜中に娘を窓から逃がせようと牒し合せた。当番の哨兵に秘密を打ち明けて、力を借りることにして置いた。

ところがその夜は俄かに嵐が吹き荒んだ。常々二時間交替の番兵が一時間で交替した。娘はそんなことを露知らない。歩哨も士官の秘密を知らない。真夜中の闇に動く白いものを見て歩哨が呼び止めた。

「止れ。誰か。」

答へがない。彼は発砲した。それから毎夜白い兔がその場所を走つた。娘の生れ変りだといふ。

もう一つの話。——十三世紀の初めのこと、ルクセンブルグのヴァレラン公の麾下でその名を知られた若い貴族が、バイエルロ

ツツの城の騎兵の娘と結婚することになった。ヴァレラン公はロオンにある自分の邸宅で婚礼の式を挙げるやうに命じた。さて当日娘がロオンへ着くと、公爵の胸には怪しい焰が燃え出した。彼女は他人の妻とするには余りに美し過ぎた。公爵は悪い計略をめぐらせて花婿や娘の父や自分の夫人を遠ざけてしまった。そして宝石や美しい衣裳を山と積んで娘を誘惑した。清らかな娘は脆かつた。それと知つた娘の父は憤りの余り死んでしまった。花婿も死んだ。ある夜娘もたうとう姿を隠してしまった。

一二日後に娘の死骸が見つかつたといふ報せで、公爵は急いで駆けつけたが、不思議や彼がその場に着くと同時に死骸がふつと消え失せた。そしてその跡へふいと山羊が現れた。体中に珠を鏤めてきらきら光つてゐる山羊だつた。誰が追つかけても捕まらな

い。
その美しい山羊は今でも見かける人があるといふ。その尾を捉へて放さなかつたら宝石の山へ連れて行かれるといふ。

〔「香の樹」全集五八八、五八九頁〕

リユクセンバーグの白兎——むかしリユクセンバーグに一人の父親と娘が住んで居た。この町の周囲を廻る城壁には守備兵を配置してあつたが其一士官が娘を恋した。然し父親は結婚に大反対で遂に娘を修道院へ入れてしまった。けれども、修道院の窓は城壁に向つて開いて居たので娘の所在は忽ち士官に分り二人の間に首

尾よく言葉が取交はされた。娘は士官と喋し合せ次の晩の夜半を期し其の窓から逃げ下りると云ふことに極めた。士官は予め当番の哨兵に事情を打明け助力を受ける事にして置いた。所が其夜俄かに暴風雨が起り、隊長の命令で番兵は今迄の二時間交替を止めて一時間交替と云ふことになった。待ち設けた時は愈々到来した。さうして秘密を知らない兵士が城壁を守つて居る。真夜中闇を通して白い怪物が見える。「誰か？」と兵士は怒鳴つた。返事がない。彼は発砲した。士官の愛人は其処に哀れな最後を遂げたのであつた。それ以来、毎夜白い兎が其の場所を走る。之れは娘の生れ変わりであると云ふ。

ローンの山羊——十三世紀の初めバイエルロツツの城に騎士が住んで居たが、其の美しい娘はヴァレラン公(リユクセンバーグ)の麾下で、有名な若い貴族と結婚することになった。公は其の婚礼をロオンに於ける自分の邸宅で行ふやうに命じた。さうして愈々当日娘が其の地へ着くと公爵は恋の擒となり、事を設けて花嫁の父、新郎及び自己の夫人を遠ざけ、娘には宝玉や立派な衣裳などを贈つて歓心を求め、遂に情婦としてしまった。父は悲憤の余りに、若い貴族も纏て死んだ。娘も亦遂に或夜突然姿を匿した。いくら搜索しても見当らない。一二日後になつてから、娘の屍が坑の入口に横たはつて居ると云つて召使が注進して来た。公は急いで現場へ駆けつけたが、其処へ着くや屍は消え失せて、其の跡からピカ／＼珠玉を鏤めた山羊が現れた。之れを捕獲しようと

したが逃げ廻るのでどうしても捕へ得なかつた。此の不思議な山羊は今日でも見ることが出来ると云ふ。若し誰でも其の尾を捉へて放さなかつたら、宝玉を積重ねてある場所へ引張つて行かれるさうである。

〔輪廻転生に関する伝説(上)〕「輪廻の伝説」中の「リュクセンバーグの白兔」「ローンの山羊」

先と同様に、文章を簡潔にする方向で改変がなされているが、先ほどとやや異なるのは、〈ローンの山羊〉の娘に対して、〈清らかな娘は脆かつた〉の一言を付加しているところである。この一文には、娘は強欲ではなく、純心であったことが示されている。娘は〈清らか〉であり、〈清らか〉であるがゆえに〈脆かつた〉のだと解釈することは、いささか穿ちすぎかもしれないが、ともかくも、娘が〈清らか〉であることは、その悲劇性を強調するのである。先と同様に、月子によってこの逸話が紹介されていることも勘案しておくべきである。〈清らかな娘〉の脆さを、月子はあるいは妹の菊子に見ていたかもしれない。しかし、それは月子、菊子、鳥子という、姉妹かもしれぬ三人の登場人物たちに、皆当てはまることからである。

さらに、続けることにする。

「ルクセンブルグで撃ち殺された娘ばかりぢやなく、死んでから兎に生れ変わる話は沢山ございますわ。巫女はこんど生れる時に兎

になるつて、西洋のいろんな国でよくさう申しますわ。マン島なんかでは今でも兎を食べないさうでございますわ。牛だとか、白馬だとか、黒馬だとか、それから猿や猫や犬なんか、地方地方でその動物がちがふやうですけれど、とにかく豚なら豚を食べちゃいけないつて禁じてあるところがずるぶんございますわ。それが人間の生れ変わりだといふ云ひ伝へのためなんですの。——バアリング・ガウルドつて人の話に面白いのがございますわ。」と月子だつた。

バアリング・ガウルドの二代か三代前のお祖母さんは死んでから幽霊になり、果樹園や田圃に現れて果物盗人とろすずを追ひ払つたりした。遺族の人々はその亡霊を鎮めるために七人の人に頼んだ。この一隊は何百年の昔から生茂つてゐる樫の大木の下で目指す幽霊に行き会つた。ところが七人のうちの一人が酒に酔つてゐて呪文をまちがへた。そのために亡霊は白い鼻に化けてしまった。それから後毎夜この鼻は白い振子のやうにガウルドの家の前でゆらゆら揺れてゐた。ガウルドの兄が鉄砲で撃つた。それで亡霊は二度と現れなくなつた。

また、バアリング・ガウルドがある日一人の婆さんの病氣を見舞ひに行つた。するとその婆さんが妙なことをいひ出した。

「昨夜私は死んだ兄を見ましたよ。兄が窓硝子を翼でばたばた叩いて行きましたよ。」

「なんだつて。」

「兄が大きい真黒な鳥になつて来たのです。鳥みたいな鳥ですけど、もつともつと大きいのです。その鳥がしつこく羽根を窓にぶつつけてゐましたよ。きつと私を迎へに来たのですよ。」

「そんなをかしなことがあるものかね、お婆さん。お前さんの気のせみだよ。」

「いいえ、声の調子で確かに兄だと分りました。兄は生きてゐる時にいい人間ぢやなかつたから、白鳥にはなれなかつたのでせう。」と、婆さんはその黒い鳥が兄だと信じ切つてゐるやうだつた。

〔「香の樹」全集五八九、五九〇頁〕

巫女と兎——歐洲の諸国では、巫女は死後兎になると云はれて居る。マン鳥などでは今日でも兎を食べない。兎はどこかの婆さんの生れ変りだからと云ふのである。斯様な意味から牛、馬、(白馬とか黒馬とか特殊の制限を付する場合多し)猿、猫、犬、豚などの食用を禁ずる地方も随分ある。

老婆と梟——以上の例は獸類に限つて居たが、人間の魂はまた鳥や虫にも宿ると考へられる。之れに就いてバーリング・ガウルド氏は次のやうな物語をして居る。「私の玄々祖母は此の世を去つて後、かなり物議を惹起させた。彼女の亡霊は果樹園や田畑に現れて盜賊を追ひ払つたりしたのである。この亡霊を鎮める為め人を七人頼んだ。今でも昔のやうに繁茂して居る榎木の下で此の七人の一隊は亡霊に出会つた。然しその中の一人が酔つぱらつて呪

文を間違へたので目的は遂に達せられず、亡霊は白い梟に化けてしまつた。この梟は其の後毎夜私の家の前で振子のやうに揺れて居たが、私の兄が鉄砲で打取つた。それで彼女の亡霊はもう現はれなくなつた」と。

〔「輪廻転生に関する伝説(上)」、「輪廻の伝説」中の「巫女と兎」「老婆と梟」〕

鳥——バーリング・ガウルド氏が、或日病臥中の老婆を見舞ひに行つたら、病人は氏に向つて斯う物語つたさうだ。「私は昨夜兄を見ました。兄は来て窓へ翼をぱた／＼打付けました。」氏は驚いて其の意味を問ひ返した。老婆の兄と云ふのはもう暫く以前に死去した人なのである。病人は答へた。「兄は大きな黒い鳥になつて来ました。鳥のやうな、然しまだ大きいのです。而して窓硝子へ打付かつて居ました。私を迎ひに来たのです。」氏は此の出来事をそんな意味にとらせまいとして、色々老婆に云ひ聞かせたけれども、彼女は頑として自己の所信を主張し、「声の調子で確かに私の兄である事が分りました。それから兄は本当の善人ではありませんでした。それで白鳥になれなかつたのでせう。確かに私の兄でした。決して間違つて居ません」と答へたと云ふことである。

〔「輪廻転生に関する伝説(上)」、「輪廻の伝説」中の「鳥」〕

これまでに紹介してきた「輪廻転生に関する伝説(上)」の文章のほぼすべては、「A BOOK OF FOLK-LORE」に記述がある。それは、第二章の「The Spirit of Man」と第三章の「The Body of Man」からの抄訳である。しかし、冒頭でも触れた通り、「輪廻転生に関する伝説(上)」の中で、三枝はこの「老婆と梟」「鳥」の箇所だけに「パーリング・ガウルド」の名前を記述しており、したがって、これを受けて、川端はその箇所だけが「ヘアリング・ガウルド」の文章であると誤認しているのである。

「イギリスの田舎では(日の落ちる時)つて俗謡を農夫達がよく歌ふんでございますつてね。やつぱり娘が白鳥に生れ変つた歌ですわ。歌の文句はところによつてちがふさうですけど、話はどこ歌も同じなんでございませう。ケント地方の歌は確かこんなだつたと思ひますわ。——村雨を避けて木蔭に寄り添ひながら恋人が急いで帰つて行く。白い前掛けをかぶつてゐるので、私は白鳥とまちがへて恋人を撃つてしまつた。ちやうど日の落ちる時の薄明りだつたから。若者よ、鉄砲を持つなら日の暮時は用心おし。

「このケント地方の歌が一番古いんでございませう。デヴォン地方の歌では、娘がほんとの白鳥に生れ変つて居りますわ。——美しい娘が夜白鳥になつて来ていふ。おお恋人よ。早く涙を乾して下さい。私はあなたを咎めない。日の落ちる時、恋人に撃たれて

私は天国へ行けたのですもの。——それがソマアセット地方の歌になると、ずつとお芝居じみて居りますわ。ジンミイといふ若者が娘を撃ち殺した罪で、巡回裁判所の法廷に引き出されて居りますよ。あはや死刑の宣告をされようとする時に、一羽の白鳥が法廷へ飛び込んで来て、ジンミイの弁護をいたしますの。この白鳥がポリイといふ殺された娘の生れ変りなんですつて。白鳥の真心こめた言葉が裁判長の心を動かして、ジンミイが無罪になる——なんだかよくは覚えませんが、そんな風な歌でしたわ。」

〔「香の樹」全集五九〇、五九一頁〕

娘と白鳥——英国の農夫などが歌ふ俗謡に「日の落つる時」と云ふのがある。歌の文句は地方により多少相違して居るが、ケント地方のは次のやうなものである。

来よ皆若者／鉄砲持つなら、／鉄砲用心／日の暮れる時、
／お前は向ふ見ず／何を打つのか、／恋人を撃つた／日の落つる時。／村雨の中を／恋人は急ぐ、／木影により添ひ
／雨を避けて、／前掛けを被つてる、／私は白鳥と間違へた。／恋人を撃つた／日の落つる時。

またデヴォン地方では、
美しい娘が夜／白鳥になつて／云ふ、お、恋人早く／涙を乾して、／あなたをとがめない／私は極楽へ行けた。／恋人に撃たれた／日の落つる時。

ソマーセット地方では、青年は巡回裁判所の法廷に立ち、今や死刑を宣告されんとして居る。

六週間目に／裁判官が来た時、／若いポリーは／白鳥になつて／呼ぶ、ジンミー／若いジンミーに罪はない、／彼は決して死刑になるまい／恋人を撃つても

この弁護により青年は遂に無罪放免になるのである。以上の俗謡の中で、白鳥に化けた娘が法廷に忍び寄り愛人の無罪を歌ふと云ふのが最古の形式で、デヴォンシヤのは後に之れを合理化したものであると云はれて居る。然し何れの形にしろ、この俗謡は非常に古い歴史を有つて居る。さうして娘の魂が白鳥に化けると云ふ所から、我々は輪廻の思想が今日猶歐洲の農民間に残つて居る事実を認め得るのである。

〔輪廻転生に関する伝説(上)〕「輪廻の伝説」中の「娘と白鳥」

典拠における歌の内容は、ほぼ正確に再現されているが、これを評するコメントには若干の相違がある。ヘケント地方の歌が一番古いとする「香の樹」に対して、原典は「ソマーセット地方」のものが最も古いとしている。これは、川端の単純な誤認とも見える。また、ヘソマーセット地方の歌になると、ずつとお芝居じみて居りますわ。と川端は月子に語らせているが、これは「デヴォンシヤのは後に之れ(片山注・ヘソマーセット地方)の歌」を合理化したものである。を受けのことかもしれない。しかし、ニュアンスは異なっている。〈芝居

じみて〉いると批判的に語る月子のもの言いには、裁判という切迫した事態を厭い、現実的な思慮を除いたところで、より詩的な空気を求めたいという思いが込められているのであろう。ここもやはり、月子の形象にかかわる川端の措置が想像されるのである。

以上が、「輪廻転生に関する伝説(上)」を典拠として川端が制作したと認められる箇所である。

川端は、この「輪廻転生に関する伝説(上)」が掲載されている、大正六年十一月発行の「変態心理」(第一巻二二号)を直接手にとつて、「香の樹」を制作したと推定される。三枝十一のプロファイルについては今回の調査で不明のままのだが、後に三枝がこれらの連載を刊行したという事実は見当らなかつた。

ちなみに、〈A BOOK OF FOLK-LORE, by Sabine Baring-Gould, 1913〉の翻訳には、他に、ベヤリング・グールド著今泉忠義訳『民俗学の話』(昭和五年十一月 大岡山書店)がある。今泉は「国学院雑誌」に大正十五年十一月から昭和三年一月にかけて、ベヤリング・グールド著「民間伝承学」と題して翻訳を連載しており、『民俗学の話』はこの連載を改訂したものである。大岡山書店発行のものは、戦後に再び改訂されて、ベヤリング・グールド／今泉忠義訳『民俗学の話』(昭和三十年五月 角川文庫)として再刊されている。

川端の引用している箇所は、〈A BOOK OF FOLK-LORE〉の前半部にあたる。つまり、「香の樹」の連載以前に、該当の箇所は「国学院

雑誌」に掲載されており、時系列の観点からすれば、今泉訳を川端が見ていた可能性はある。しかし、今泉の訳語は三枝としばしば異なっており、また、既に検証したように、詳細にわたって三枝との一致が認められるゆえ、「輪廻転生に関する伝説(上)」が典拠であることは確実である。

川端が「変態心理」(第一巻二号)を直接手にとっていたことは、「輪廻転生に関する伝説(上)」が掲載されている直前の頁に、キューゲルゲンに関する記事が発見されることから知られる。それは医学士と肩書が記された加藤元一「珍しい睡遊の例」であり、「最近の新聞雑誌から」というタイトルの下に、雑誌「青年」から転載されたものである。川端は「香の樹」の冒頭を、このキューゲルゲンの記事から始めている。

口笛を吹きながら、ドイツの詩人キューゲルゲンが人通りのと絶えた夜更の街を歩いてゐるところへ、ばさりと美しい少女が天から降つて来た。街燈の光りで見ると気絶してゐる。娘は夢遊病者だつたのだ。屋根の上を眠りながら歩いてゐたのだが、詩人の口笛のために目を覚まして落ちたのだつた。——キューゲルゲンの「若き日の思ひ出」の中で読んだ話を時雄はふとしたはずみで持ち出した。「須彌燈会」の集まりだつた。

(中略)

しかし、キューゲルゲンの話は皆を笑はせたばかりだつた。

詩人の口笛に目を覚まして夢遊の美しい少女が屋根から落ちる——この青花のやうな夜の美しさを時雄自身のやうには誰も感じてくれないらしかつた。だから彼はなにげなくいつた。「しかし、もう僕らは街を歩きながら口笛を吹くことなんかないね。」

(「香の樹」冒頭、五八〇、五八一頁)

睡眠中に無意識に夜行する人がある。これは睡中夜行又は睡遊と名づけられるもので、真夜中に床をぬけ出して雨戸をあけ、数時間も散歩して又床に入る。そして明朝、何事も知らない。独逸の文豪キューゲルゲンと云ふ人が『若き日の思ひ出』の中に、面白い一節を挿れてゐる。それは、ある日友を訪れてのかへるさ。夜晩く人通の絶へた町の軒を、口笛を吹きながら通つてゐたら、俄然屋根の上から黒いものがどつと落ちて来た。驚いて街燈でしかして見ると、花らしい女が気絶してゐる……乙女は屋根の上を睡遊してゐたのであるが、口笛のために目覚めて生気づき落ちたのである。睡遊してゐる時落ちずに覚めると落ちるいふのは一寸可笑い様であるがそうでない。吾々が覚めてゐる間に屋根棟を伝ふとすると、「落ちはせぬか」といふ様な恐怖や不安などが、沢山に頭に湧き出して来て、中心を旨くとつて渡らうとする注意の集注が出来なくなり、すつべたり踏み外したりして落ちるのである。今仮に屋根峯丈の広さの板が地上に置いたとすれば、誰も踏

み外したりする人はない。三歳の児でも渡る事が出来る。丁度睡遊に於ては、地上に画れたる屋根の上を渡る様なもので、不安もなければ恐怖もないから巧みに曲芸が出来るのである。斯うして見ると、集注といふ力が如何におそろしいものであるか分る。

——青年——

(加藤元一「珍しい睡遊の例」)

Kugelgenを「キユウゲルゲン」と表記することには無理があり、これは川端の誤記である。両者を照合してみると、Kugelgenを加藤が「文豪」としているのに対し、川端は「詩人」と記している。「若き日の思ひ出」とは、「Jugend Erinnerungen eines alten Mannes, 1870」のことであるが、そのいち早い翻訳に『生ひ立ちの記』（伊原元治等訳、大正三、興風書院）がある。そこには森鷗外が序文を寄せており、鷗外は「彼は同時代の人のためには画家であった。併し後世の人のためには詩人である。」と記している。川端は、あるいはこの序文を参照して、「詩人」と変更したのかもしれない。

また、指摘しておかなければならないのは、この話が「青い花のやうな夜の美しさ」と評されている点である。心理学的な逸話を、詩的な解釈で染めようとする意図である。しかし、小説家で神秘主義者の矢野時雄によってなされるこの解釈は一般性をもたず、その場に居合わせる人々との感受性の齟齬から、「香の樹」の章は展開されてゆくのである。

(続く)

(注1) 以下、「全集」の表記は、『川端康成全集第二十二巻』（昭和五七・一新潮社）を指す。

(注2) 引用の嵩を減らすため、原文における改行を「
」で示した。以下も同様である。